

「あまおう」9月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は平成30年8月20日現在の登録資料に基づいて作成しています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

【今後の管理のポイント】

☆10月初旬で、最大葉（横）8.5cm 程度の生育を目安に

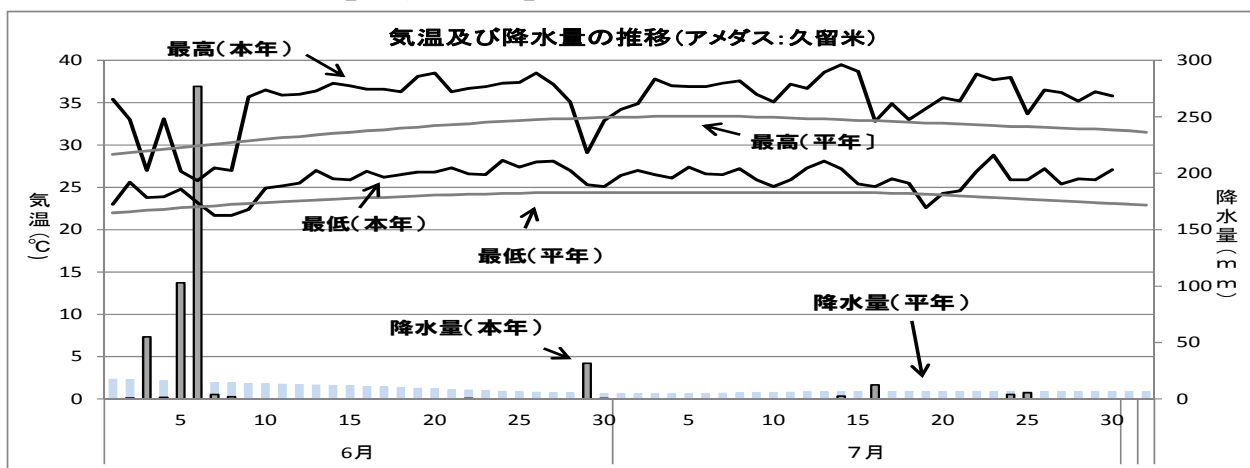
- ・花芽分化確認後の適期定植
- ・2番花房分化促進のための寒冷紗被覆（早期作型）
- ・ハダニ類防除対策

7月上旬の大雨の影響で一部根傷みが見られ、苗の充実不足が目立ちましたが、8月には天気が回復し、苗質も徐々に改善されました。梅雨時期の生育遅れ、梅雨明け以降の高温の影響はありましたが、平年並の苗の仕上がりとなっています。

今後の気温は平年並で推移するとの予報がでていますが、普通ポットでは花芽分化の遅れが懸念されるので、寒冷紗被覆を行って下さい。

病害虫では、梅雨明け以降の高温乾燥により、アブラムシ類やハダニ類の発生が見受けられます。また、炭そ病も散見されます。病害虫を本ばに持ち込まないように、発病株の早期発見・早期除去並びに防除の徹底に努めて下さい。

図1 【気象の経過】（アメダス久留米より）

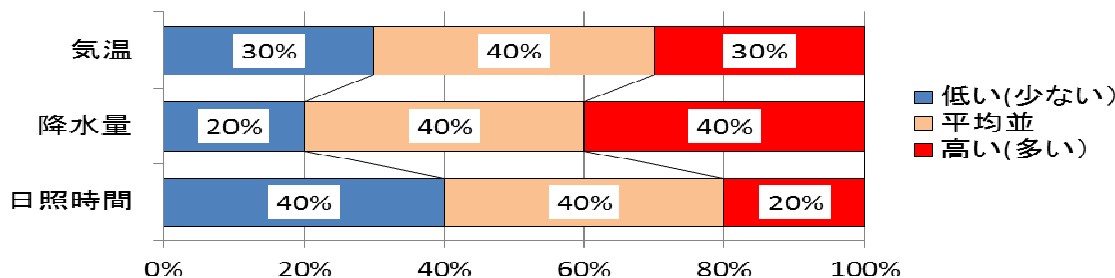


気象予報と今後の見通し

【気象予報】

福岡管区気象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

- 1か月予報（九州北部地方 予報期間：9月1日～9月30日 発表日8月30日）



【今後の見通し】

気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少なくなる可能性が高い予報です。

育苗管理（普通ポット）

- 体内窒素が切れると、定植前に草勢が落ち込み早進株の発生が多くなりやすいので、生育状況を見ながら、既に肥料が切れているほ場では液肥で追肥を行う。
- 根張りが悪い(根傷み・根量不足)場合は、回復するまで葉面散布(OKF-1 1,000倍、メリット青500倍など)を2~3回行う。
- 花芽分化安定のため、8月下旬頃から寒冷紗被覆を行う。

定植

- 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根傷み防止のために、定植前に寒冷紗を被覆し地温を下げる。
- 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20~23cmを目安にする。
- 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化ステージ(表1)になってから定植する。早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になり出蕾の不揃いや乱形果の発生及び二番花房の分化の遅れの原因となる。特に、早期作型では厳守する。
- 深植えは、生育不良になりやすいため注意する。

表1. 定植日と花芽分化ステージの目安

定植日	花芽分化ステージ
9月10~14日	分化~ガク片形成
9月15~18日	分化~ガク片形成
9月19~22日	分化
9月23日~	肥厚後期

定植後から二番花房対策までの管理

◎早期作型（株が旺盛になりやすく、二番花房が遅れやすい）

- 寒冷紗被覆

株づくりのため活着後寒冷紗を一旦剥ぐ

活着促進のため、定植から7日間程度被覆を行う(表2)。活着後は、株づくりのため一旦寒冷紗を剥ぎ、日光に当てる。

9月下旬~10月上旬頃に二番花房分化対策のため、寒冷紗を再被覆する。

寒冷紗被覆の目安

1回目:定植前から活着まで(7日程度)

2回目:9月下旬頃から二番花房分化確認まで

表2. 寒冷紗の種類と遮光率

種類	遮光率
シルバー寒冷紗 109番	39%程度
黒寒冷紗 600番	51%程度
黒寒冷紗 610番	58%程度

- かん水

二番花房対策に向けて徐々にかん水量を減らす(図2)

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後は、勢いをつけすぎないように徐々にかん水を控える。ただし、極端に乾燥させすぎると生育が遅れるので、土壤水分を見ながら適宜行う。

- その他

追肥は、二番花房の花芽分化を確認してから行う。

マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝肩まで上げておく。

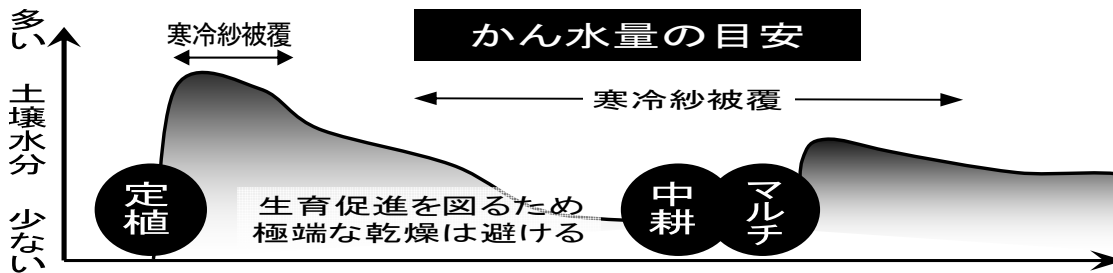


図2. 定植後のかん水管理（早期作型）

◎普通作型（二番花房が続きやすい）

充分なかん水等により生育促進に努め、二番花房対策は行わない

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後はかん水制限や寒冷紗被覆による生育制限は行わない。

活着不良などで生育が悪い場合、葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めることなどで生育促進に努める。

病害虫防除

害虫は発生初期の防除、病害は発生前の予防散布が重要。

定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始める。

【炭そ病】

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるので、絶対に定植しない。
- 定期的な予防散布を徹底する。
- 定植後に発病株を確認した場合は速やかに除去し、予備苗による植え替えを行う。

【うどんこ病】

- 定植後からビニル被覆まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなる。寒冷紗を被覆した場合は、軟弱徒長しやすくなるため特に注意する。

【ハダニ類】

- 高温（25～30℃）ほど増殖力が高い。
- ナミハダニはイチゴ苗上で生活する（ほ場周辺からの侵入はほとんど無い）。
葉数が多くなれば薬剤がかかりにくくなるため、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後は、特にしっかりと防除する。
- 天敵を使用する場合は、天敵に対して影響が長い農薬使用を避ける。

【アブラムシ】

- ほ場周辺の雑草を除去する。また、発生初期からの防除を徹底する。

【ハスモンヨトウ・オオタバコガ】

- 発生初期の若齢幼虫時（体長1cm程度まで）の防除が重要である。
- 大豆畑周辺のほ場では、周辺からの飛込みが多いので注意する。
- 広食性で寄主範囲が広いので、ほ場周辺の除草を徹底する。

【チビクロバネキノコバエ】

- ほ場外の農地や雑草地で年間を通して発生する。特に、高温・高湿度の時期に発生が多い。
- 苗からの持込みやハウス外からの飛び込みにより、主に株元で増殖する。
- 幼虫が地際部や花器を食害する。食害されることで芯葉の伸長停滞や奇形果が生じる。
- 苗での持ち込みを防ぐとともに、本田での初期防除を実施することが重要。

写真1. チビクロバネキノコバエの幼虫



トピックス 「天敵を上手につかってハダニ類の防除をしましょう」

ハダニ類の防除対策の一つとして、天敵の活用があります。天敵をうまく活用するためには導入時期や導入後の薬剤選択が重要なポイントとなってきます。天敵を組み合わせ、本田でのハダニ類の被害を抑制しましょう。

【天敵放飼のポイント】

○放飼の手順

天敵はボトル内で偏在していることがあるため、ボトルを回転させ、軽く振り、均一にして放飼しましょう。（写真2）放飼する間隔は150cm程度とし、軽く振り、葉上に振りかけます。



写真2. 放飼前のボトルの均一化

○天敵放飼前の徹底防除

定植後、マルチ被覆前後に天敵に対する影響期間の短い薬剤（アファーム乳剤、コロマイト水和剤など）を散布し、ハダニ類の密度を下げます。また、ビニル被覆前までは、選択的薬剤や気門封鎖剤を散布し、ハダニ類の密度増加を防ぎます。

○天敵放飼のタイミング

天敵はビニル被覆直後にミヤコカブリダニ、チリカブリダニを放飼します。厳寒期は天敵の働きが鈍くなり、ハダニ類の発生が増加しやすくなります。そのため、12月に選択的薬剤で補完防除を行い、1月上旬にチリカブリダニを追加放飼します。

表3. 天敵を利用した防除体系例

		主な作業	防除
9月	中旬	定植	
	下旬		
10月	月上旬		薬剤防除（アファーム乳剤など）
	中旬	マルチ被覆	薬剤防除（選択的薬剤）
	下旬	ビニル被覆	ミヤコカブリダニ （5000頭/10a） チリカブリダニ （3000頭/10a）
11月	月上旬		
	中旬		
	下旬		
12月	月上旬		
	中旬		薬剤防除（選択的薬剤）
	下旬		
1月	月上旬		チリカブリダニ （5000頭/10a）
	中旬		
	下旬		薬剤防除（選択的薬剤）

【薬剤選択のポイント】

天敵導入後は使用できる農薬が制限されます。表4を参考に、天敵導入後の補完防除には影響の少ない薬剤を使用しましょう。

表4. 天敵に影響の少ない選択的薬剤

対照害虫	薬剤名
ハダニ類	マイトコーネフロアブル、ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル
アブラムシ類	チェス顆粒水和剤、ウララ DF
アザミウマ類	マッチ乳剤
ヨトウ類	マッチ乳剤、プレオフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、プレバソソフロアブル 5

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！